おごせ教育 Pick up

越生小学校

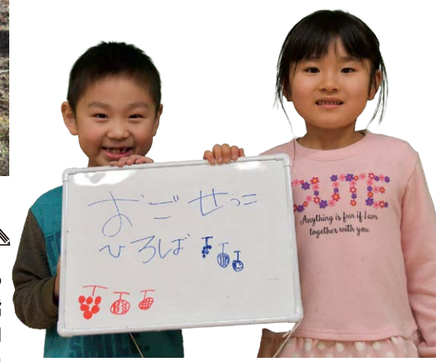
1月23日（火）は、6年生が社会科見学で国会議事堂と科学技術館に行きました。普段見ることができない国会議事堂の議場等を見学することができました。また、科学技術館では、生活の中に活かされている科学を体験しながら学習し、より身近に科学を感じることができました。

梅園小学校

1月19日（金）は、5年生が植樹体験を行いました。新さくらの山公園で、埼玉森林サポータークラブ・川越農林振興センター・越生町産業観光課の方の指導を受けながら、植樹を行いました。実際に木を植える体験を通して、洪水や土砂の流出を防いだり、野生生物の住みかを守ったりする森林としての機能を学びました。

越生中学校

現在、越生中学校では、元気な「あいさつと返事」が響き渡る学校を目指して様々な取組を行っています。1月11日（木）、12日（金）には生活委員会の生徒たちが越生小学校と梅園小学校に出向き、一緒にあいさつ運動に参加しました。

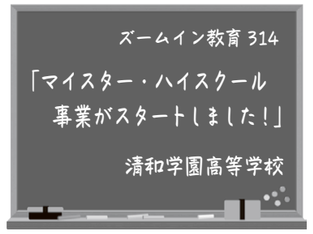


おごせっ子広場

町内の小中学校や町の行事等に参加する子供たちを写真で紹介するコーナーです。

清和学園高等学校は、今年度、文部科学省からマイスター・ハイスクール事業の指定校の認定を受けることができました。指定校は全国に一八校あり、私立高校では全国で初の指定校となります。NTT東日本からCEOを管理職としてお迎えし、越生町長さんに出前授業をお願いする等、今学校は刺激と活力が生まれています。また、多くの大学と連携し、企業や地域の方々と協働して授業を展開するなど、皆様と力を合わせて進めてまいります。

写真は、埼玉工業大学で行われたバスの自動運転の体験学習と、越生町の梅・ゆず・栗を使い開発・販売を目指したチョコプロジェクトの様子です。生徒達は新しい授業に目を輝かせて取り組んでいます。



越生町の「梅・ゆず」を使った新商品の開発を目指す中から、大きく変化するこれからの世界を生き抜く力を身に付けた、次世代を担う人材を育成したいと考えております。

越生浪漫 No.181

越生の平安仏 ―県指定文化財編―

大河ドラマ『光る君へ』の舞台が平安時代であることにちなみ、越生町に伝存する平安仏の一部をご紹介します。

世代を越えて先人たちが受け継いできた、千年近い時を生きる大切な文化財です。

木造薬師如来立像（もくぞうやくしにょらいりゅうぞう） 像高 138.6ｃｍ

（像容）
- 肩幅の広い長大な体軀
- 通肩の法衣をまとい、太めの衣文が股から太腿にかけて Y字状に流れる（平安初期の如来形立像の表現と共通している）
- 表面に漆箔（しっぱく）（剥落）が認められる

（概要）
下ヶ戸薬師堂（しもがどやくしどう）（黒山）の秘仏本尊。頭部及び両腕肘から先、背板などを欠失していたが、平成４年から解体修理が行われ、現在の姿に復元された。ヒノキ材で、頭体部を一材から彫り出し（一木造（いちぼくづくり）という技法）、内刳（うちぐり）（木材の乾燥・収縮によるひび割れを防ぐため内部をくり抜く技法）が施されている。像を支える支柱に江戸時代中期の元文（げんぶん）３年（1738）の修理銘がある。
※県立歴史と民俗の博物館に寄託

木造如意輪観音半跏像（もくぞうにょいりんかんのんはんかぞう） 像高 81.0ｃｍ

（像容）
- 二臂（にひ）（腕２本）、左足を垂下して台座上に坐す
- 宝髻（ほうけい）を結い、宝冠を被る
- 眉、眼、口髭等を墨書し、唇に朱をさした痕跡あり
- 全体的に丸みのある姿
- 制作は平安後期ながら、面相に古い作風（鼻や顎など）が認められる

（概要）
観音堂（如意）の本尊。カヤ材の割矧造（わりはぎづくり）（頭体幹部を一材から彫り出し、耳のあたりで前後に割って内刳（うちぐり）をし、再び矧（は）ぎ合わせる技法）で、割首（わりくび）（頭部と体部を切り離し、内刳を施してから再び接合する技法）が施されている。胎内背面に平安時代後期の応保（おうほう）２年（1162）の造像銘を墨書する。台座、持物、法衣の一部、両手肘から先、左足などは後補のものである。

木造五大明王像（もくぞうごだいみょうおうぞう）

不動明王像（ふどうみょうおう）	像高 89.0ｃｍ
軍荼利明王像（ぐんだりみょうおう）	像高 102.6ｃｍ
大威徳明王像（だいいとくみょうおう）	像高 98.3ｃｍ
金剛夜叉明王像（こんごうやしゃみょうおう）	像高 105.5ｃｍ
降三世明王像（ごうざんぜみょうおう）	像高 101.3ｃｍ

（概要）
廃寺となった岩渓山長徳寺（がんけいざんちょうとくじ）（黒岩）の境内堂の本尊。５体ともにカヤ材の割矧造（わりはぎづくり）、彫眼（ちょうがん）（木を彫り出して眼を表現する技法）が施されている。不動明王の胎内背面に江戸時代中期の延享（えんきょう）元年（1744）の修理銘が墨書されており、各像の砥粉塗（とのこ）、火炎光背、台座、持物などはこの時の後補と推定されている。※歴史と民俗の博物館に寄託

▲左から軍荼利明王像、大威徳明王像、不動明王像、金剛夜叉明王像、降三世明王像

（像容）
- 簡素で素朴、個性的な作風から、平安時代末ごろの地方在住の仏師の造像と推定されている
- 眼や唇などの一部に彩色が施されている